青年の愛着スタイルが友人関係とインターネット利用に及ぼす影響

宮　本　邦　雄

問題と目的

Bowlby（1969）の愛着理論によると、乳幼児は愛着対象を安全基地として利用して世界を拡大し、不安や恐怖に駆られた時には心の平安を得るために安全な避難場所として愛着対象を利用することを示した。その自己と愛着対象との関係性の個人差は内在化され、内的作業モデル(IWM)としてその後の人生における対人関係に一般化されるとした。IWMは「自分は愛着対象から愛される価値のある存在か」という自己モデルと「愛着対象は自分を保護してくれるか」という他者モデルとからなり、繰り返された愛着対象との相互作用をとおして一般化・抽象化された自己と他者の期待や信念を含んでいる。

IWMの階層的ネットワークモデル(Collins & Read, 1994)によると、一般的な自己と他者との愛着関係の表象が最上位に位置し、その下の親子関係・仲間関係・恋愛関係といった領域固有的モデル、さらにその下には特定の相手に関係した関係固有的モデルが配置される。このモデルは他者との相互作用の準拠枠として作用し、対人認知や情動制御、さらには社会的適応に影響することが報告されてきた(金政・大坊,2001；宮本,2006他)。

また、乳幼児期における愛着の個人差（安定型、回避型、アンビバレント型）に対応する形で成人の愛着スタイルの個人差も親密な対人関係の研究の対象に取り上げられるようになった(Hazan & Shaver,1987)。しかし近年、親密な関係に対する快適さの次元（親密性の回避）と親密な関係に対する不安の次元（見捨てられ不安）の２次元モデルによりとらえる立場が受け入れられている(Brennan,Clark, & Shaver,1998)。さらに、両次元を自己と他者（愛着対象）のポジティブなIWMとネガティブなIWMに対応させ、両者の組み合わせから成人の愛着スタイルを分類する４カテゴリー・モデルが提唱された(Bartholomew,1990)。すなわち、自分は他者から愛情を受ける価値がある／愛着対象は信頼できるし関心をもってくれるというポジティブなIWMと自分には価値がない／他者も信頼できないし拒否的であるというネガティブなIWMの組み合わせで、両者ともポジティブな安定型、自己モデルがポジティブで他者モデルがネガティブな拒絶回避型、自己モデルがネガティブで他者モデルがポジティブなとらわれ型、両者がネガティブな対人恐怖的回避型（恐怖回避型）である。

安定型は、他者への信頼感や自尊心が高く、対人関係を調整することができ、他者との相互作用の中で感情を表出する。拒絶回避型は、他者に対して拒否的敵対的であり、他者に依存することが少なく、感情を抑制する傾向がある。とらわれ型は、他者に対する不信感、他者からの分離不安がみられ、いつも他者の気持ちを知りたいと思う。恐怖回避型は、他者の気持ちを信じることができないし、自分にも自信がない。他者に拒絶される恐れから孤立する傾向がある(安藤・遠藤,2005)。

こうしたIWMは、愛着対象が養育者から友人関係へと移行する青年期においても、友人関係の持ち方に大きく影響し、特に個人間の適応性に焦点を当てると「親密性の回避」が対人関係の適応性を低下させることが報告されている(金政,2007)。

青年の友人関係は、つかず離れず、相手を傷つけたり傷つけられたりすることを避け、表面的な関係性を維持していくという、気配りの必要な関係であることが報告されてきた。岡田（2007）は、友人関係を避け自分の中にこもる傾向の「自己閉鎖」、他者から「傷つけられることの回避」、他者を「傷つけることの回避」、表面的で円滑な関係を求める「快活的関係」の４因子によって友人関係の把握を試みている。内面的関係を求める「自己閉鎖」の低い青年は全体的に適応を示すが、現代的青年である自他ともに傷つくことを避ける青年や内面的関係を避ける青年は不適応傾向を示すことが認められた。

近年、携帯電話の機能が拡大し、インターネット(IT)はいつでもどこでも誰でも使える、コミュニケーション、情報収集、娯楽のツールとして用いられるようになった。内閣府（2013）が青少年を対象に行ったインターネット利用の実態調査によると、ソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）の利用は学年が上がるにつれ活発化し、高校生になると36％の者がSNSを利用している。ミクシーやフェイスブック、ラインなどのSNSは、友人や知人とのコミュニケーションを格段に効率よく行うことができ、親密性を高める一方で、その「閉鎖的活動」

という特徴によっていわゆる「SNS 疲れ」という問題が発生してきている(加藤 ,2013)。こうした状況の中で、IT 利用によってコミュニケーションの形態も大きく変化し、利用の仕方には個人差も大きいと考えられる。

微妙な関係を調整・維持していくことに苦手意識をもつ者は、非言語的なコミュニケーションを介さずに適切な対人距離を保ちつつ情報交換が可能な IT の利用によって対人関係を充足していると考えられる。また、ある程度のソーシャルスキルを有する者は、IT を利用することで更に対人関係のネットワークを拡充していくとも考えられる。

IT 使用の心理面への影響については、孤独感や抑うつが高まるという悪影響とソーシャルサポートなどにポジティブな効果をもつ可能性が示されてきた。例えば、安藤・高比良・坂元（2005）は、中学生を対象にネット使用が友人関係の孤独感とソーシャルサポートに与える影響について検討し、Eメールの使用が多いほど友人関係の孤独感が下がり、ネット使用が全体的に多いほどネット上やネット外の友人からのソーシャルサポートが増えるというポジティブな効果を報告した。さらに福島・石原（2013）は、高校生の友人関係及び携帯電話利用と「見捨てられ不安」との関連を検討し、携帯電話利用時間高群は低群よりも「見捨てられ不安」が高く、ソーシャルネットワークサービス（SNS）利用時間低群は高群よりも友人関係の「傷つけられ回避」が高いことを見出した。

本研究は、青年期において愛着スタイルが友人関係のもち方に影響し、それが IT 利用の多様性にどのように影響するかを検討することである。IWM の２次元のうち「見捨てられ不安」は、自他が傷つくことを回避する傾向を高め、交流のための IT 利用が多いであろう。一方、「親密性の回避」は、友人との内面的関係やソーシャルサポートは低く、交流的な IT 利用も少ないであろう。愛着スタイルの分類からみると、安定型は、友人関係において適切な心理的距離を保ちつつ親密な関係を維持し深めていくことができるであろう。IT 利用については、情報収集や学習・仕事ための利用と交流のための利用がバランスの取れたものになるだろう。拒絶回避型は、友人との深い関係をもつことはなく、交流のための IT 利用は低いと予想される。さらに、とらわれ型は、高い「見捨てられ不安」によって友人との相互作用に慎重になる一方、交流のための IT 利用は高いと思われる。最後の恐怖回避型は、友人との相互作用からの退避と交流のための IT 利用は極めて少なく、インターネットへの逃避傾により娯楽や暇つぶしの利用が多いと予想される。

方法

調査対象：東海地方の大学生及び専門学校生 232 名(男性 89 名、女性 143 名)、平均年齢 19.0 歳(SD＝1.23)が調査対象となった。

質問紙の構成

1）フェイス・シート：年齢、性別、学年、学校区分、居住（自宅・非自宅）を尋ねた。

2）インターネット利用状況：情報収集、ソーシャルネットワークサービス（SNS)、ゲームなどの３領域で 15 項目に４件法で回答を求めた。

3）インターネット活動：「ブログを運営している」「ツイッターを行っている」「インターネットを通してできた友人がいる」「インターネットでトラブルにあったことがある」の４項目に、はい、いいえの回答を求めた。

4）インターネット利用の理由：情報収集、情報発信、交流、趣味、暇つぶし・習慣などの 24 項目に４件法で回答を求めた。

5）友人関係尺度(岡田 ,1999)：友人関係を通して傷つけられることの回避、傷つけることの回避、快活な関係、内面的関係の 20 項目に６件法で回答を求めた。

6）友人ソーシャルサポート尺度(嶋 ,1991)：心理的サポート、娯楽関連的サポート、道具・手段的サポート、問題解決志向的サポートの 12 項目に５件法で回答を求めた。

7）愛着スタイル尺度(ECR-GO) 中尾・加藤(2004)：親密性の回避と見捨てられ不安の２下位尺度から成る。24 項目に７件法で回答を求めた。

調査の実施：2013 年７月～ 10 月に講義を利用して実施した。質問紙に、個人情報の保護、調査への参加・不参加は自由意志によることを明示し、口頭でも説明した。

結果

１．各尺度の因子の確認

インターネット利用状況の 15 項目について、主因子法・プロマックス回転で因子分析を行った。いずれの因子にも負荷量の低い項目、複数の因子に負荷量の高い項目を除き、スクリープロットの減衰状況から４因子を抽出した（表１）。検索機能やホームページ、ブログを利用する「情報収集」（α＝.717)、辞書や事典を利用する「学習利用」（α＝.572)、ツイッターやラインなどを利用する「交流１」（α＝6.13)、ミクシーやグリーなどを利用する「交流２」（α＝.309）の４因子であった。

表1　インターネット利用因子分析結果（プロマックス回転後の因子パターン）

質問項目	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4
1．情報収集				
I2　お気に入りのホームページ	.857	-.085	-.110	.050
I3　お気に入りのブログ	.649	.179	-.016	-.028
I4　お気に入りの掲示板	.531	-.025	.108	.106
I1　グーグルやヤフーなどの検索機能	.428	-.057	.261	-.209
2．交流1				
I12　フェイスブック	-.014	.705	.059	.067
I9　ツィッター	.141	.554	-.094	-.047
I10　ライン	-.094	.490	.007	-.141
3．学習利用				
I7　ウィキペディアやヤフー知恵袋	-.044	.068	.820	-.004
I6　辞書や事典サイト	.068	-.103	.520	.083
4．交流2				
I11　ミクシー	.018	.082	.053	.596
I14　グリー	.013	-.167	.006	.390

因子相関行列

	1	2	3	4
2	.177			
3	.408	-.082		
4	.174	.410	.155	

表2　インターネット利用の理由因子分析結果（プロマックス回転後の因子パターン）

質問項目	因子 1	因子 2	因子 3
1.交流			
R1　考えを人に知ってもらう	.795	-.125	.002
R9　気持ちや感情を表現するため	.755	.110	-.113
R5　自分の存在を知ってもらう	.744	-.152	.028
R17　知人との交流を深めるため	.601	.082	.056
R21　新しい出会いを求めて	.582	-.156	.016
R2　寂しさをまぎらわせるため	.555	.132	-.082
R13　趣味が同じ人とのグループ活動	.528	.074	-.080
R24　会話の話題を得るため	.467	.099	.076
2.娯楽			
R8　面白いから	.007	.828	-.159
R23　楽しいから	-.060	.799	-.032
R4　娯楽のため	-.192	.704	.008
R18　習慣的に	.198	.455	.053
R6　くつろぎを得るため	.029	.444	.065
R10　時間をつぶすため	.125	.427	.030
R20　好奇心をみたすため	.038	.426	.238
3.情報			
R19　勉学や仕事のため	-.092	-.256	.698
R3　知識を広げるため	.092	.030	.668
R15　情報を探索するため	-.191	.197	.585
R7　ニュースを知るため	.011	.089	.474
R11　新しい考えを得るため	.252	.145	.462

因子相関行列

	1	2	3
2	.384		
3	.296	.391	

第４因子は信頼性が低かったが分析に加えた。

またインターネット利用の理由24項目についても同様に因子分析を行い、３因子を抽出した（表２）。「交流」（α＝.837）は、考えを人に知ってもらうことや気持ちや感情を表現するため、「娯楽」（α＝.781）は、面白いから・娯楽のため、「情報」（α＝.717）は、勉学や仕事のため・情報検索のためであった。

友人関係尺度の20項目については、友達からバカにされたり仲間の前で恥をかかないようにする「傷つけられ回避」（α＝.791）、相手に自分の意見を押しつけないように相手の気持ちを気使う「傷つけ回避」（α＝.736）、自分の心を打ち明けたり悩み事を相談したりする「内面的関係」（α＝.805）、受けるようなことをしたり冗談を言って笑わせたりする「快活的関係」（α＝.736）の４因子を確認した（説明率50.3％）。岡田（2007）と同様の因子構造であったが、「内面的関係」は解釈可能性を考慮し、本研究では「自己閉鎖」から名称を変更した。

友人ソーシャルサポート尺度について同様の因子分析を行った結果、明白な因子が抽出されなかったため一因子構造として以下の分析を行うこととした（説明率48.2％、α＝.898）。

愛着スタイル尺度は、中尾・加藤（2004）の抽出した２因子において負荷量の高い12項目ずつを使用したため、因子分析（主因子法、バリマックス回転）によって「見捨てられ不安」（α＝.884）と「親密性の回避」（α＝.806）の２因子を確認した（説明率37.8％）。

２．各下位尺度の記述統計と尺度間相関

愛着スタイルの「見捨てられ不安」と「親密性の回避」、IT利用の「情報収集」、「学習利用」、「交流１」と「交流２」、IT利用理由の「交流」、「娯楽」、「情報」、友人関係の「傷つけられ回避」、「傷つけ回避」、「内面的関係」、「快活的関係」、及び「友人ソーシャルサポート」について平均と標準偏差を男女別に表４に示す。性差を検討するためにｔ検定を行ったところ、IT利用の「学習利用」で男性が女性よりも高い得点を示した。さらに友人関係の「傷つけ回避」、「内面的関係」、さらに「友人ソーシャルサポート」において、女性が男性よりも高い得点を示した。

各尺度間のピアソンの積率相関係数を算出したところ（表５）、愛着スタイルの「見捨てられ不安」は、友人関係の「傷つけられ回避」と中程度の正の相関、「友人ソーシャルサポート」と低い負の相関、愛着スタイルの「親密性の回避」は、友人関係の「内面的関係」、「友人ソー

表３　各尺度の記述統計の性差

	男性 88～90		女性 142～145			
	平均	SD	平均	SD	t	p
愛着スタイル						
見捨てられ不安	45.5	11.00	44.0	13.31	.887	ns
親密性の回避	45.8	11.37	46.2	10.35	-.276	ns
IT利用						
情報収集	10.2	3.09	10.4	3.30	-.404	ns
学習利用	4.5	1.62	4.0	1.36	2.356	<.05
交流１	7.5	2.70	7.9	2.63	-1.186	ns
交流２	2.5	1.12	2.4	0.95	.859	ns
IT利用理由						
交流	17.5	5.39	16.8	5.28	.938	ns
娯楽	21.8	3.72	22.8	3.85	-1.868	ns
情報	15.0	2.82	14.8	2.86	.279	ns
友人関係						
傷つけられ回避	13.2	3.65	14.2	4.02	-1.852	ns
傷つけ回避	20.0	3.91	22.5	3.58	4.928	<.001
内面的関係	10.7	3.05	12.0	3.04	3.127	<.01
快活的関係	12.3	3.07	12.9	2.71	-1.468	ns
友人ソーシャルサポート	34.8	6.90	39.2	6.11	5.094	<.001

シャルサポート」と中程度の負の相関が認められた。またIT利用の「交流1」と低い負の相関が見られた。

さらに友人関係の「傷つけられ回避」はIT利用理由の「交流」、「傷つけ回避」はIT利用理由の「情報」、「内面的関係」はIT利用の「交流1」、「快活的関係」はIT利用理由の「娯楽」及び「情報」と、それぞれ低い正の相関が認められた。

最後に「友人ソーシャルサポート」はIT利用の「交流1」と中程度の正の相関、IT利用理由の「娯楽」「情報」と低い正の相関が見られた。以上の相関関係より、愛着スタイル－友人関係－IT利用という関連が示唆されたので重回帰分析を行った。

3．愛着スタイル、友人関係、IT利用の重回帰分析

愛着スタイルが友人関係に影響し、さらにIT利用に影響を及ぼすというモデルを重回帰分析によって検討した。その結果、図1に示すように、愛着スタイルの「見捨てられ不安」はIT利用の理由への直接的影響は明白ではなかったが（「情報」$\beta=-.155$）、「傷つけられ回避」（$\beta=.452$）に強い促進的影響を示した。この「傷つけられ回避」は、IT利用の理由の「交流」（$\beta=.213$）、「娯楽」（$\beta=.182$）、「情報」（$\beta=.187$）に促進的影響を示した。さらに、「見捨てられ不安」は「友人ソーシャルサポート」に抑制的影響を示し（$\beta=-.218$）、この「友人ソーシャルサポート」がIT利用の「交流1」を強く促進し（$\beta=.368$）、「娯楽」にも促進的に影響した（$\beta=.184$）。

一方、「親密性の回避」はIT利用の「情報収集」、「交流1」、IT利用の理由の「交流」に直接抑制的影響を及ぼすとともに、「友人ソーシャルサポート」への抑制的影響（$\beta=-.339$）及び友人関係の「快活的関係」への抑制的影響（$\beta=-.154$）を介してIT利用に間接的に影響した（娯楽、$\beta=.156$）。

4．愛着スタイル別の友人関係、IT利用の比較

愛着理論に基づき、「見捨てられ不安」と「親密性の回避」の平均得点を基準に高低群をつくり、両者の組み合わせにより安定型、とらわれ型、拒絶回避型、恐怖回避型の愛着スタイルの4タイプを設定した。この4タイプ間の友人関係とIT利用の相違を検討するために、1要因分散分析を行い、必要な場合はLSD法による多重比較を行った。

IT利用で有意な主効果が見られたのは図2に示すように「交流1」であり（$F(3,199)=6.097, p<.001$），安定型、とらわれ型が拒絶回避型よりも高い得点を示し、恐怖回避型が最も低い得点を示した（$MSe=6.749$）。

また図3に示すようにIT利用の理由についても、「交

表4　愛着スタイル、IT利用、IT利用理由、友人関係の各尺度間の相関係数

	愛着スタイル		IT利用				IT利用理由			友人関係			
	見捨てられ	親密性の回避	情報収集	学習利用	交流1	交流2	交流	娯楽	情報	傷つけられ	傷つけ回避	内面的	快活的関係
愛着スタイル													
見捨てられ不安													
親密性の回避	.140*												
IT利用													
情報収集	.009	-.096											
学習利用	.033	.072	.333**										
交流1	-.151*	-.265**	.128	-.064									
交流2	.078	-.003	.133*	.144*	.164*								
IT利用理由													
交流	.187**	-.153*	.192**	.098	.416**	.240**							
娯楽	-.083	-.083	.339**	.103	.213**	.044	.374**						
情報	-.089	-.107	.127	.335**	.006	.009	.257**	.397**					
友人関係													
傷つけられ回避	.464**	.164*	.108	.078	-.072	.036	.219**	.152*	.175**				
傷つけ回避	.031	.110	-.015	.047	-.029	.057	.055	.197**	.240**	.417**			
内面的関係	-.126	-.582**	-.033	-.088	.224**	-.074	.085	.126	.113	-.194**	-.001		
快活的関係	-.022	-.155*	.130*	.096	.087	.109	.076	.268**	.230**	.224**	.279**	.131*	
友人ソーシャル	-.259**	-.366**	.090	-.094	.356**	-.001	.143*	.274**	.212**	-.086	.204**	.576**	.316**

* p<.05、**p<.01

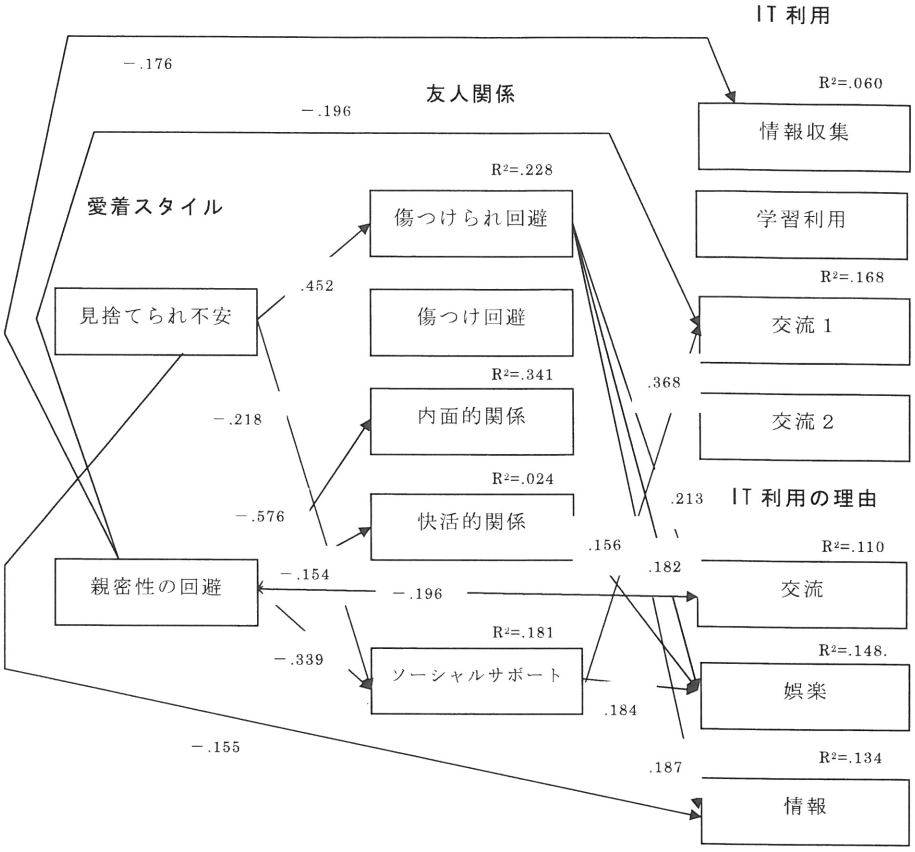

図1　愛着スタイル、友人関係、IT 利用の重回帰分析によるパス図

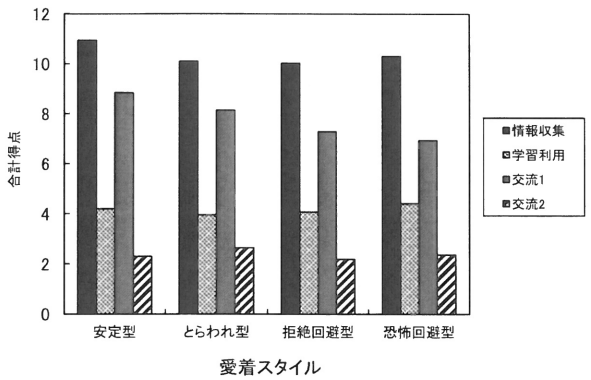

図2　IT 利用下位尺度の愛着スタイルのタイプ別平均得点

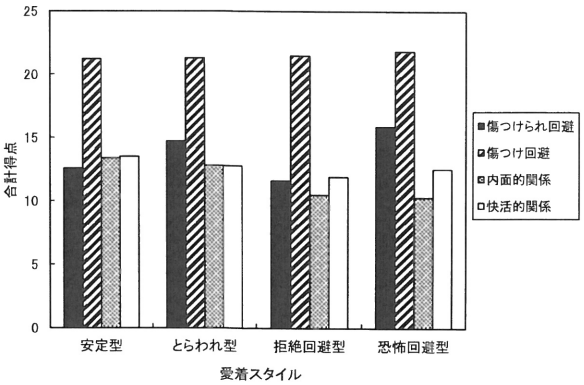

図4　友人関係下位尺度の愛着スタイルのタイプ別平均得点

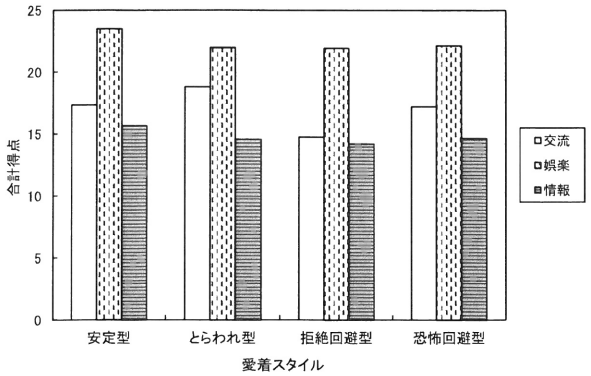

図3　IT 利用理由下位尺度の愛着スタイルのタイプ別平均得点

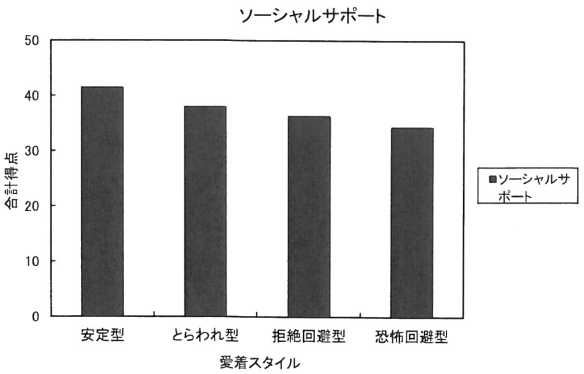

図5　友人ソーシャルサポートの愛着スタイルのタイプ別平均得点

流」において有意な群間差が見られ（F（3,199）＝4.454,p<.01）、安定型、とらわれ型、恐怖回避型が、拒絶回避型よりも高い得点を示した（MSe＝26.713）。

さらに友人関係においては（図４）、まず「傷つけられ回避」が有意であり（F（3,199）＝16.195,p<.001）、とらわれ型と恐怖回避型が安定型と拒絶回避型よりも高い得点を示した（MSe＝12.223）。また「内面的関係」も有意であり（F（3,199）＝16.622,p<.001）、安定型ととらわれ型が拒絶回避型と恐怖回避型よりも高い得点を示した（MSe＝7.938）。さらに「快活的関係」で有意な群間差がみとめられ（F（3,199）＝2.694,p<.05）、安定型が拒絶回避型よりも高い得点であった（MSe＝7.937）。

「友人ソーシャルサポート」についても群間差が有意であり（F（3,199）＝13.090,p<.001）、安定型が他の３タイプよりも高く、とらわれ型は恐怖回避型よりも高かった（MSe＝40.225）。

考察

本研究の目的は、大学生において愛着スタイルが友人関係のもち方に影響し、それがIT利用の多様性にどのように影響するかを検討することであった。

愛着スタイルが友人関係に影響し、さらにIT利用に影響を及ぼすというモデルを重回帰分析によって検討した。その結果、「親密性の回避」はIT利用の「情報収集」、「交流１」、IT利用の理由の「交流」に直接抑制的影響を及ぼすとともに、「友人ソーシャルサポート」と友人関係の「快活的関係」への抑制的影響を及ぼした。この両者はIT利用の「娯楽」に促進的に影響していた。

一方、「見捨てられ不安」は「傷つけられ回避」に強い正の影響、「ソーシャルサポート」に負の影響を示した。「傷つけられ回避」はIT利用の理由の「交流」、「娯楽」、「情報」に促進的影響を示した。さらに、「見捨てられ不安」は「ソーシャルサポート」に抑制的影響を示していた。

以上より、「見捨てられ不安」は友人から傷つけられることを回避するために、交流、娯楽、情報といったIT利用全般について動機づけを高める。しかし実際の利用にはその影響は顕在化しないという関連性が示唆された。一方、「親密性の回避」は友人との「内面的関係」及び友人のソーシャルサポートを抑制し、ITを介した交流も不活性化することがわかった。

愛着スタイルと友人関係、IT利用についての以上の関連は、愛着スタイルを独立変数とした分散分析からも示唆された。まず友人関係の「傷つけられ回避」において、とらわれ型と恐怖回避型が安定型と拒絶回避型よりも高い得点を示し、「見捨てられ不安」次元で差がみられた。これは福島・石原（2013）の結果と一致しており、不安感をもちながら友人とのつながりを維持するためにIT利用が促進されるという心理的機制が高校生と同様に働いていることを示唆している。「内面的関係」では、安定型ととらわれ型という「親密性の回避」が低いタイプで高い得点を示した。これは岡田（2007）が指摘しているように、現代青年によくみられる自他共に傷つけあうことを回避した表面的な付き合い方を反映していると考えられる。

インターネット利用については、ラインやフェイスブックの利用である「交流１」で、安定型ととらわれ型が拒絶回避型よりも高い得点を示し、恐怖回避型が最も低かった。前２者は「親密性の回避」の低さを反映し、SNSを利用した交流の活性化を示している。そして恐怖回避型は現実場面とともにインターネット交流においても退避傾向であることを示している。しかし、「情報収集」と「学習利用」についてはタイプ間の差が見られず、IT利用の理由の「娯楽」「情報」のいずれにも差が見られなかった。当初予想していたような、友人関係において退避傾向にある者がインターネット世界に長時間費やすという傾向は認められなかった。

またIT利用の理由で「交流」は、安定型、とらわれ型、恐怖回避型は拒絶回避型よりも高い得点を示した。恐怖回避型の青年はITを通して交流を求めているが、実際には実現できていないという状況がうかがえる。

本研究では、青年の愛着スタイルを「見捨てられ不安」と「親密性の回避」の２次元及び４タイプの比較を通して、友人関係のもち方とIT利用の多様性にどのように影響するかを検討した。いくつかの変数において性差が認められたが、サンプル数が少なかったことから男女別の分析はできなかった。今後の課題としたい。

要約

青年期において愛着スタイルが友人関係のもち方に影響し、それがIT利用の多様性にどのように影響するかを検討した。大学生と専門学校生232名に対して、愛着スタイル尺度、インターネット利用状況、インターネット活動、インターネット利用の理由、友人関係尺度、友人ソーシャルサポート尺度を用いて調査を実施した。

重回帰分析の結果、愛着スタイルの「親密性の回避」は友人との相互作用とともにITを介した交流も不活性化することがわかった。一方、「見捨てられ不安」は友人

から傷つけられることを回避する傾向を強め、交流、娯楽、情報といったITの利用を動機づける。しかし実際の利用には顕在化しないという複雑な関連が示唆された。

以上の関連は、愛着スタイルを独立変数とした分散分析からも示唆された。IT利用のフェイスブックやブログによる交流は、安定型ととらわれ型が拒絶回避型よりも高い得点を示し、恐怖回避型が最も低かった。またIT利用の理由の「交流」は、安定型、とらわれ型、恐怖回避型は拒絶回避型よりも高い得点を示した。

引用文献

安藤玲子・高比良美詠子・坂元章　2005　インターネット使用が中学生の孤独感・ソーシャルサポートに与える影響　パーソナリティ研究 ,**14**,69-79.

安藤智子・遠藤利彦（2005）青年期・成人期のアタッチメント　数井みゆき・遠藤利彦（編）　アタッチメント生涯にわたる絆　ミネルヴァ書房

Bowlby,J.(1969/1982) *Attachment and Loss: vol.1 Attachment.* New York: Basic Books.

Brennan,K.A.,Clark,C.L.,&Shaver,P.R. 1998 Self report measurement of adult attachment: An integrative overview. In J.A.Simpson & W.S.Rholes(Eds.), *Attachment theory and close relationships.* New York: Guilford Press.

Collins,N.,& Read,S. 1994 Cognitive representations of adult attachment: The structure and function of working models. In K.Bertholomew & D.Perlman(Eds.) *Advances in Personal Relationships: Vol.5. Attachment Processes in Adulthood*(pp.53-90) London: Jessica Kingsley.

福島裕人・石原美穂　2013　高校生の友人関係と見捨てられ不安との関連ー携帯電話利用状況の観点よりー　東海学院大学論叢 , 神谷哲郎先生追悼号 ,89-99.

Hazan,C. & Shaver,P.R. 1987 Romantic Love conceptualized and attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology,* **52**, 511-524.

金政祐司・大坊郁夫　2001　青年期の愛着スタイルと社会的適応性　心理学研究 ,**74**,466-473.

金政祐司　2007　青年期の愛着スタイルと友人関係における適応性との関連　社会心理学研究 ,**22**,274-284.

加藤千枝　2013「SNS疲れ」に繋がるネガティブ経験の実態ー高校生15名への面接結果に基づいて　社会情報学 ,**2**,31-43.

宮本邦雄　2006　女子大学生の内的作業モデルと宗教意識・ストレスコーピング・抑うつの関連　東海女子大学紀要 ,**25**,101-108.

岡田　努　1999　現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について　教育心理学研究 ,**47**,432-439.

岡田　勉　2007　大学生における友人関係の類型と、適応及び自己の諸側面の発達の関連について　パーソナリティ研究 ,**15**,135-148.

嶋　信宏　1991　大学生の友人ソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究，教育心理学研究 ,**39**,440-447.

内閣府（2013）青少年のインターネット利用環境実態調査　http://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/